

時に教へ子や知人などの演奏會ありて行きたる折は、曲の終はる毎に聊かの響感買はむばかりの大きな拍手をするが常なり。好演奏を褒め、ご苦勞様の意のほかに、他の聴衆に今の演奏評價されたしとの贊意を求むる感情の傳達含まれをると我ながらをかしくも思ふところなり。

そも西洋音樂に於ける拍手は、感激、賞讃が本來の意味ならむ。されどその逆もあり、我には體驗なきも、劣れる演奏、作曲にはブーイング起るといふ。いづれにせよ西洋文化は感情移入の振幅が大きいと見受けらる。日本人にとりて西洋古典音樂鑑賞はかなりの月日も経ち、樂章の終はる前に拍手して首をすくめたり、或いは競ひ合ふやうに終りと同時に拍手するなどといった不細工も減りて、鑑賞も深くにまで及べりといへど、拍手に今一つ調和を虧く嫌ひ感ぜらる。

數年前、切符贈られたれば、横濱みなとみらいの大ホールにて、クリスマスと新年のために結成されたるかと思はるゝウイーンからの交響樂團を聞きに行きしことあり。いはゆるニューイヤール・コンサートを意識してかヨハン・シュトラウスの曲幾つか演奏されたる中に、恆例とも言ふべき「ラデツキー行進曲」あり。指揮者、さてこそそこぞとばかりに聴衆に拍手をうながすこと頻りなり。されど拍手せるは人數の半ばほどか、なんとも調子の合はぬままに曲終はれり。本場ウイーンのニューイヤールコンサートをテレビにて見聞すること何回かありて、着飾りたる聴衆全員のウイーン・フィルに合はせての拍手は、共通感覺そのものにて音樂の一部をなすとさへ思はれたり。比して落差の大きかりしを、元々日本人にはかかる拍手は似つかぬものならむと感じたり。

元來邦樂は拍手はせぬものなり。無關心からなどにはなく、今聞ける音樂の内容、音色などを心の内に反芻し、更めて鑑賞するが本來なればなり。この六月、國語問題協議會の講演會にてソプラノ歌手藍川由美さん、「音樂で讀み解く君が代」と題する講演をす。多年、宮内廳の岩波滋元首席樂長に師事したる樂器は日本固有とさるる和琴にて、その伴奏にて神樂歌や催馬樂、更には和歌披講歌はる。現在公に用ゐらるゝ和琴は長さ二メートル程なれど、藍川さん、埴輪像に見らるゝと同じ一メートル弱の和琴を作らせ、それを弾きながらの講演なりし。演奏終りて會員の多くが拍手を送りたれど、女史瞬時にそれを制して、拍手なせそ、折角なる「魂振り」の妨げになるがゆゑにとのたまふ。余、拍手をせざるにはかかる理由もありたるかと感心措く能はず。齋藤緑雨が言葉思ひ出づ。

○拍手喝采は人を愚にするの道なり。つとめて拍手せよ、つとめて喝采せよ、

渠（かれ）おのづから倒れん。

この言より想起さるるは共産圏の政治家達なり。本來なら多數者が少數者を讚美、贊意を示すために起す行動と考へらるゝところなるが、かの國々におきては、壇上の少數者がまづ己れ達のために拍手をうち、對面する多數者それに迎合するかのやうに盛大ならざるを得ぬ拍手を送る。ラデツキー行進曲の指揮者による拍手懲憑が想ひだされ、緑雨の言の眞なるが信じらる。